

特集2 連続セミナー 地域発：脱グローバル経済の未来

はじめに

2020年ににわかに広まった新型コロナ感染拡大によって、私たちの暮らしは大きく変わった。「With コロナ」、「新しい日常」と言われるようになってから、はや三年目を迎えている。コロナ禍にあって改めてグローバル経済に取り込まれた生産、物流、消費体系など、私たちの生活を困らせていた状況が極めて脆弱であり、大都市圏の生活の難しさが再認識されただけでなく、地方と都市部との分断と格差が一層進んだということ私たちは改めて確認している。さらに、リモートの生活様式になりつつある中で、生身の人と人との関係が一層希薄なものになり、これまでとは異なる孤立感、閉塞感、生きづらさの中で生活しているという感覚が強くなってきた。

その一方、こうした状況が起こる前から日本では多くの地域発の試みが新しい社会と経済の在り方を模索してきた。グローバル・コンサーン研究所では、こうした問題意識のもとに2020年11月に「脱グローバル経済の未来を描く—新しい社会創生の可能性」というオンラインシンポジウムを開催した（報告書は当研究所のホームページに掲載中）。その時焦点を当てた脱成長論や地球の健康という視点にたち、引き続き地域発の実践に目を向けて、議論を続けたいという思いから、2021年度は本連続セミナーを開催した。

地域主体で育まれてきた主体性に目を向けて新しい社会の創生のヒントを得たいというのが趣旨であった。一回目は、海でつながる地域づくりということで山口県の室積半島で始まったコミュニティ経済づくりについて現地女性たちの活動を中心に紹介した。二回目は都会と田舎の壁を超える里山コモンズというテーマで千葉県鴨川市にある釜沼集落の経験を伺いながら、都市に住む人々が農村に住む人々と交流を重ねることで、都会と地元の人々が地域の豊かさを共有、共感していくという「共感経済」をキー概念としてそのプロセスを学んだ。そして、三回目は、長年、自然と人間の関係性について独自の思想を展開されてこられた哲学者、内山節先生をお迎えし、そのお話を改めてじっくりと伺いながら崩壊しつつある社会関係性を見直して、私たちは今、どのような共同体を再生しようとしているのか、そしてそれは創造しうるのかを展望した。

以下は、各回のまとめである。

幡谷則子（はたや のりこ）（グローバル・コンサーン研究所・上智大学外国語学部）

第1回
海でつながる地域づくり
～山口県室積半島のコミュニティ経済～

開催日：2021年7月6日

登壇者：中野佳裕（早稲田大学 地域・地域間研究機構 次席研究員、
グローバル・コンサーン研究所客員所員）

木村明美（室積市場ん代表）

磯部登志恵（同副代表）

室積半島は山口県東部に位置する小さな半島である。『平家物語』の舞台となったこの場所は、古代より周防灘を船で往来する歌人たちに詠まれてきた。中世には近隣の上関と共に海上交通の要衝となり、江戸時代に入ると北前船の交易によって商業的にも繁栄した。歴史家・網野善彦はかつて、この地域の漁村が都市的機能を備えた港町であったことを指摘している¹。1943年の市町村合併で光市の一部になるまで、室積は複合的な自治機能を持った集落として発展してきた。



写真1 室積半島全景（中野佳裕提供）

¹ 網野善彦『日本社会再考——海から見る列島文化』ちくま学芸文庫、2017年。

このセミナーではまず、室積出身である筆者が、同地域の歴史と環境について説明した。今日、地域づくりに関わる人には「土の人」「風の人」「水の人」の3つのタイプが存在すると言われている。「土の人」とはその土地に数世代暮らす土着の人であり、「風の人」は他所から移住をしてきた人である。地域づくりには両者の協力が不可欠だが、しばしば風人は新しいアイデアを吹き込みすぎて、地元の慣習に馴れ親しんだ土の人との良質な関係の構築が困難になる。両者を橋渡しするのが「水の人」である。「水の人」は、他所から移住してきたがその土地に一定期間住み、ちょうど水が土にじわじわと浸透するように「土の人」と信頼を醸成する。「土の人」「風の人」「水の人」の三者がうまく繋がることで、内発的な地域づくりは芽生えてくる。

筆者の実家は江戸時代末創業の和菓子屋で、室積には家族七世代にわたり暮らしてきた。私にとって故郷の歴史とは、文献資料を通じて学ぶだけに留まらず、「土の人」として先祖代々語り継がれてきたものであり、自身の生活経験を通じて獲得したものである。筆者の報告では、室積や上関を含む周防灘沿岸島嶼部は、中世から近世にかけて海上交通によって発展したため、このエリアを理解するには「海から地域を見る」という視点が必要であると述べた。そして明治以降の近代化の歴史は陸中心の開発の歴史であり、その結果として海から地域を見る視点が相対的に後退していったことを指摘した。特に第二次世界大戦後に室積半島周辺地域が経験した開発問題として、近隣地区への工場立地の結果起こった公害（瀬戸内海の汚染）、上関原発建設計画によるコミュニティの分断、後継者不足と景気後退による地元経済衰退、高齢化・人口減少による地元の活力の衰退などがあることを、統計データを示しながら説明した。そしてこれらの複合的な地域開発問題と向き合いながら、内発的な地域づくりを模索してきた過去十年の様々な取り組みについて説明した。

続いて「室積市場ん」代表の木村明美さん、副代表の磯部登志恵さんからコミュニティ経済活動についての説明があった。木村さんは20年前に近隣の平生町から室積に移住した。2011年からは漁港の近くで元漁師さんの家をリノベーションしたカフェ・レストランを運営している。地元で定住して時間をかけて溶け込んでいったという意味で、「水の人」である。磯部さんは室積出身の「土の人」で、長年光市議会議員を務めてきた経験から、地域再生について高い関心を持っている。

「室積市場ん」は2020年3月に地元の女性たち有志が始めたプロジェクトである。筆者の実家だった旧中野昌晃堂（2015年末閉業）の店舗スペースをリノベーションし、毎週火曜日に地元の生産者が食料品や雑貨を販売する「火曜マルシェ」を運営している。木村さんは、このプロジェクトのきっかけとなったのは、2020年1月25日に筆者が室積で企画したイベント「未来のまちづくり ― 人とつながる、自然とつながる、まちが変わる」であるという。このイベントでは、イタリアの経済学者ステファノ・バルトリーニを室積に招いて「関係の豊かなコミュニティづくり」について議論した。会場に偶然居合わせた

参加者の女性たちが集まり、「大好きな室積のために、何かを始めよう」とグループを結成したのが始まりである。

活動は新型コロナウイルス感染症の流行第一波の最中に始まった。木村さんは、この拘束条件のおかげで活動の方向性が明確になったと振り返る。というのも、数年前より旧中野昌晃堂を活用した地域再生プロジェクトについて地元の仲間たちと話し合っていたが、当初は地元の社会課題（買い物難民、空き家問題 etc.）の解決を優先しつつも、同時に国内外からの旅行者をターゲットにした「長期滞在型・体験型ツーリズム」の育成も構想していた。しかし感染症流行で人の移動が制約を受ける中、「地元の生活のニーズに応える顔の見えるコミュニティ経済づくり」に特化することが決まった。

既に数年前より、室積半島沖の牛島（うしま）では、地元企業によって海底湧水を利用する塩造り、塩と地元食材（海産物、農産物）を使ったレストラン経営（*網元の旧店舗をリノベーションして利用）などが始まっていた。「室積市場ん」はこれらの動きと連携しながら、買い物難民問題と空き家問題という室積の二大課題の解決に取り組んでいる。

買い物難民の解決。毎週火曜日午前9時～12時の3時間、旧中野昌晃堂の店舗スペースを利用して「火曜マルシェ」を開催。近郊の農家、漁師、カフェ&レストラン経営者などが出店し、農産物、海産物、お弁当、総菜、その他生活雑貨を販売する。2020年9月からは半島の別の場所で毎週金曜日に「金曜マルシェ」も開催している。半島は南北に長細いので、いくつかのエリアに分け、各エリアの高齢者が歩いていける距離で買い物ができるようにする工夫の一つである。

空き家問題の解決。副代表の磯部さんが担当しているこの事業は、室積半島の空き家物件を「室積市場ん」ウェブサイトで紹介し、移住希望者や長期滞在希望者に貸し出すマッチング事業である。「室積市場ん」は家賃の一部を手数料として受け取る仕組みである。以上2つの活動を軸としながら、「室積市場ん」はその活動とネットワークを拡大している。2020年9月には、旧中野昌晃堂の斜向かいにある旧金物屋店舗が、火曜マルシェ出店参加者の一人によって「ヒュッテ」という名前のお店にリノベーションされた。「ヒュッテ」では金物屋に残った多くの古在庫品を販売し、火曜日にはマルシェの会場としても使用している。2021年2月には旧中野昌晃堂の向かい側にある元七福百貨店のスペースを利用して、光市島田地区の障がい者福祉サービス事業所「ものゆにば (monouniver)」が制作する様々な雑貨を販売している。また2021年4月からは、火曜マルシェとは別に「つづみ」という常設店舗も開設され、近郊地域や北陸の職人が制作した漆器、木彫り製品、藍染め製品、衣料品などが販売されている。

現在、室積には少しずつ変化が生じている。最大の変化は、毎週火曜・金曜のマルシェを通じて近郊生産者や地元住民たちが出会い、顔の見える関係で交流する機会が増えたことだ。さらに「室積市場ん」の活動に触発されて地元の漁港が魚市場でイベントを始めた、別の場所でも古民家をリノベーションしたカフェが開店したりするなど、自発的に

様々な活動が立ち上がってきている。行政の補助金に頼ると「お金ありき」の地域づくりになってしまい、身動きがとれなくなる。「室積市場ん」の活動では、地元を愛する人たちが自分たちの創意工夫と社会関係資本を活用して事業を起こし、その活動がさらに新たな社会関係資本を生み出す好循環が生まれつつある。

この好循環の発生に重要な役割を果たしているのが、「室積市場ん」のメンバーたちである。室積は歴史があり、それが地元住民の結束力の強さとなって現れる一方、移住者を受け入れるには時間がかかる土地柄でもあると言われる。その中であって、磯部さんのような「土の人」、木村さんのような「水の人」が、移住者と地元住民との間のネットワーキングを行う役割を果たしている。

オーディエンスとの質疑応答では、成功の秘訣として磯部さんは、「7人のメンバーは全員女性ですが、日常生活が得意分野なのは女性なのかなと思います。男性、女性ではないのですが。でも、細かいところのちょっとした幸せを喜びと感じとれるのは、女性の方が得意なのかなと思います」と答えた。

室積には、江戸時代の頃から住民たちの共同作業で生活基盤を作ってきた「自治の文化」がある。「室積市場ん」の活動もまた、現代におけるコモンズ作りの一つであると言えるだろう。伝統職人業の家に生まれ育った筆者は、これまで常に手仕事の世界から現代社会における人間の生き方やコミュニティについて考えてきた。消費社会が過剰に発展した現代、世の中を見回せば、地域の風土に根差した生活やものづくりの文化を原体験として持っている人は著しく減ってきていると思う。室積の強みは、伝統的な生業を通じて手仕事の世界を知っている人がまだ一定数いて、その良さをわかる人たちが移住してきている点だと言えるだろう。ゆっくりでいいので、地元で暮らす人たちが楽しいと感じられる地域づくりが着実に進み、近隣の町と共に「海でつながる地域」を新たに描いていきたいと思っている。

中野佳裕（なかの よしひろ）

（早稲田大学地域・地域間研究機構／グローバル・コンサーン研究所）

第2回 都会と田舎の壁を超える里山コモンズ ～房総半島・釜沼集落の共感経済～

開催日：2021年11月6日

登壇者：林良樹（NPO 法人うず代表理事、一般社団法人小さな地球代表理事）

下郷さとみ（ジャーナリスト）

はじめに

第2回は、千葉県鴨川市にある釜沼集落の経験を引きながら、都市に住む人々が農村に住む人々と交流を重ねることで、都会と地元の人々が地域の豊かさを共有・共感していくというプロセスを学んだ。以下はNPO 法人「うず」代表で一般社団法人「小さな地球」の代表理事である林良樹さんとジャーナリストの下郷さとみさんとの対話形式での発言内容である。下郷さんはブラジルの民衆運動や、アマゾンの先住民保護区の取材を通して人と自然のつながりについて発信を続けている。鴨川市への移住歴も17年になる。

.....

釜沼集落発の農村都市交流

下郷 釜沼集落は房総半島南部の鴨川市の西のはずれの中山間地にあります。このあたり一帯は、かつては大山村だったことから大山地区と呼ばれており、近年は移住者が増えています。移住者たちが釜沼集落を舞台に地域のお年寄りたちからさまざまなことを学びながら、農村と都市住民の間をつなぐ存在として、どのような活動を行って来たのか。まずそのあたりを林良樹さんに話していただきます。

林 僕は1999年に釜沼集落に移住して、子どもを2人産んで、育てて、暮らしてきました。鴨川は首都圏から90分で海も山もある。市の内陸部のここ大山地区は、棚田百選に選ばれた大山千枚田のある中山間地です。釜沼も、国内では珍しい天水棚田、つまり雨水だけで耕作する棚田の景観が広がる集落です。

でもここは課題だらけです。高齢化、耕作放棄地、後継者不足、動物の被害、空き家だらけ…。釜沼は25世帯あるのですが、住民の90%は70歳以上です。日本全国を見ても、中山間地域が国土の73%、農地の40%、農家の44%、集落の52%を占めています。

そんな中山間地のひとつである、ここ釜沼集落の美しい風景は、千年をかけて作られた「いのちの彫刻」だと僕は思うようになりました。このような美しい風景を生み出す暮らしの文化を、里山暮らしの知恵を、僕は集落の長老たちから学んできました。

まず、この長老たちと始めたのが棚田オーナー制度です。地元住民、僕のような移住者、通ってくれる都市住民の3つの力をつなげて、お米を売る農業ではなくて体験をシェアす

る農業を始めました。1999年に鳴川市が構造特区制度によって農地を都市住民に貸し出すことができる仕組みを作り、まず大山千枚田が棚田オーナー制度を開始しました。それに倣って長老たちと一緒に釜沼北棚田オーナー制度を始めたわけです。

みんながみんな移住しなくてもいい、遊びでもいいからとにかく農村に通ってもらおう。長老たちと一緒に日本の原風景をみんなで共有していこう。首都圏3600万人の地縁血縁を越えた「ふるさと」を作っていこう。そう考えて交流を続けていくうちに、この無名の集落に年間1000人の人が訪れるようになりました。そうすると100人に1人ぐらいは2地域居住や移住の希望者が現れてきて、空き家が出たタイミングで移住が進んでいきました。外国人の移住者も増えていて、今はアメリカ、イギリス、フランス、カナダ、オーストラリアの人が住んでいます。

企業との連携も始まりました。無印良品鳴川里山トラストという活動を2014年から始めています。環境保全を前面に謳うというよりは、楽しいことやおいしいこと、美しいことをみんなで共有していく。僕はそれでいいと思っているんです。この里山に都市住民が通うことによって、皆が日本の足元にある宝物を発見していきます。

2016年に無印良品はこの棚田の一番上に棚田オフィスを建てました。設計はアトリエ・ワンの建築家の塚本由晴さんで、東京工業大学教授でもあります。新型コロナ禍の前でしたが、ここで無印良品が提案したのは、人が東京に集中するのではない働きかたとしての未来のオフィスです。つまり、「半農半X(エックス)」のビジネスバージョンですね。1階は農作業の休憩所となるあずまやで2階がオフィスです(写真1と2を参照)。



写真1 棚田オフィス(林良樹提供)



写真2 棚田オフィスの2階から美しい日本の原風景、棚田を見渡す（林良樹提供）

無印良品とは「日本酒」という商品名の日本酒も開発しました。棚田の村にはお米しかないのです。しかも平地が乏しいので生産量は少ない。このお米に価値を付けてビジネスを作りたいということで、地元の酒蔵と連携しておいしい日本酒を生み出しました。これは無印良品の店舗で販売され、銀座店のレストランでも提供されています。

また、無印良品が鴨川市とまちづくりの提携を結び、年間1千万円の赤字だった直売所の指定管理者として経営を引き受けてくれました。非常に明るく洗練された直売所になりました。

大学との連携も始まりました。今は千葉大学の和田研究室、東京工業大学の塚本研究室、明治大学の川島研究室が釜沼集落に通っています。千葉大の和田先生は民俗学の専門家で、学生たちは社会学の研究に毎年通ってくれています。東京工業大学と明治大学は建築学科です。生きた学びの実践の場として学生たちが、毎週のように通ってきています。今、東工大は共同購入した古民家の改修を、明治大学は僕の家隣の古民家の改修を一緒にやっています。学生たちは、村のすごく大きな力になっています。ただ古民家改修や研究をするだけでなく、村の共同作業の手伝いを通して、暮らしそのものが生きた学びとなっています。

アマゾンの里山から学ぶこと

下郷 里山は自然と人が出会う場所です。人間にとって自然は過酷で、人の力ではどうに

もならないことがある。ここは特に天水棚田の地域ですから、雨が降らなければ田んぼは耕せません。そんな人間の無力さを思い知らされる場所で知恵を働かせ、道具を作ったり、土と向き合ったりして暮らしを調べていく。里山とは、そういう知恵を受け継いできた場所です。でも、知恵って生きたものだから、一旦途絶えてしまうともう二度と学べません。だから、自身の身で受け継いできた最後の世代である長老たちから学ぼうということで、やってきたんですよ。

私は、NPO 法人熱帯森林保安団体（略称 RFJ）という NGO に協力して、2015 年から毎年、支援プロジェクトフォローアップのためにアマゾン先住民族の村を訪問しているんですけど、現地ですごく強く抱くのは「ここも里山だ」という感覚です。集落があって、その周りに焼き畑が、さらに外側には原生林がある。人の暮らしのある場所とジャングルの間には人の手の入った畑と回復した二次林が広がっていて、その姿がまさに「里山」だなと感じます。そして主要な村には今は衛星インターネットがつながっていて、彼らはテクノロジーを活用しつつ、社会に向けて発信しています。

私は両方の里山を行き来しながら、私たちと同様にアマゾン先住民族もまた、この同じ地球で現代という同じ時代に生きる同時代人なんだ、同じことを模索しているんだな、と実感するのです。人間である私たちは自然とどのようなつながりを持っていけばいいのか、持続可能なあり方をどう作り出していくのか、という共通する課題を生きている。

アマゾンでは、グローバル経済のもとで、大規模農業開発などのために森林破壊が急速に進行しています。そんな中で先住民族は、自給自足をベースにしつつ、どう外とつながっていきながら、持続可能な自立経済をどう作っていけばいいのかを模索しています。単純な「昔に戻れ」ではなくて、伝わってきた知恵を活かし、アイデンティティを守りながら、今の時代にどのような姿を創造していくのか。その重要性は、日本の私たちにとってもアマゾン先住民族にとっても全く同じだと思っています。

林 僕たちの暮らしがグローバルに地球全体とつながっている時代です。気づかないうちに僕たちの暮らしが地球の環境破壊に加担しているのに、地球の裏側のことまでは見えなくなっている。けれど、こういう農村に暮らしていると、それがすごく見えるんです。そのことをみんなが意識したら、消費行動や暮らしが変わってくるのではないかな。この農村に都市住民が来ることによって、社会のマイナスの面を発見するきっかけになるんじゃないのかなと思っています。そして実際にそれが起きているんです。年間を通してお米作りに参加して、雨が降らないから田んぼに水がたまらないとか、人間の力ではどうにもならないんだっていうことを現代人が体験することは非常に大きな気づきになると僕は思います。

古民家再生プロジェクトと里山コモンズ

下郷 次に「都市農村交流の発展型としての里山コモンズへ」ということで、今現在動いて

いるプロジェクトについて林さんからお話を頂きます。農村における活動は土地と密接に結びついていますので、土地を所有していない私たち移住者には限界がどうしてもありません。林さんのさらなる活動発展のきっかけとなった、とても大きな出来事がありましたね。

林 2年前の2019年9月8日に房総半島を襲った大型台風15号です。風速50mが釜沼集落を直撃しました。僕の家も被災しました。僕の家は借家の古民家で、屋根のトタンは吹き飛び、窓ガラスは割れて家じゅうがめちゃくちゃになりました。こんな大きな台風が房総半島を襲うのは長老たちも初めてだと言っています。気候変動の影響は、農業をやっているとひしひしと感じます。でも次の日、裏山に登ったら、この里山とこの茅葺風景が本当に美しく、感動してしまいました。

以前は茅葺の上にすっぽりトタンが被さっていたんですね。台風でトタンがベロンと剥がれて、その下に隠れていた茅葺が現れた。茅葺の古民家だというのは知っていたんですが、トタンでカバーされていたのであまり意識して暮らしていなかったんです。でもこの台風がきっかけで、中世が現れたんです。茅葺職人は、このトタンのことを缶詰と呼ぶそうです。まさに中世が缶詰のように保管されていた。これはある種、チャンスだと思いました。循環型のシンボルである茅、そして茅葺作業におけるコミュニティの結（ゆい）、こういったものをもう一度復活させることができるのではないかなって。衝動的にこれを復活させたって思ったんですよね。

でも、集落に2ヘクタールあった茅場はすでに失われ、コミュニティも高齢化し、房総半島にいた最後の茅葺職人はすでに引退し、全てが失われた地域です。でも僕はできない理由を探すのではなくて、できる理由を探していこうと思った。そして茅葺の再生計画をきっかけに、「小さな地球」というプロジェクトを始めました。今まで棚田の活動に年間1000人の人が通ってきてくれた、この関係人口の人たちの中から、茅葺の復興を手伝う人たちが現れたのです。



写真3 現れた茅葺き（林良樹提供）



写真4 「現代の結」茅葺屋根を再生するために行われた（林良樹提供）

クラウドファンディングと茅葺き合宿

それから、台風と同時期に集落内に出た3軒の空き家をすべて引き継ぐことにしました。うち2軒には棚田に通ってきていた友人たちが移住してくれました。そしてもう1軒の古民家——これは元村長の立派な古民家ですが——は、裏山に棚田、畑とあり、その農地ごと全部売りに出されましたが、1年かけて寄付金を集めて去年の夏に購入しました。それをさらに1年かけて、地域の資源を使ったゴミの出ない建築というコンセプトの「土に還る家」として、東京工業大学の塚本研究室と一緒に丁寧にリノベーションしました。竹林で竹を切り竹小舞を組んだ骨組みを作り、そこに田んぼの土と藁を混ぜて練り発酵させた土藁を入れて壁を塗りました。解体して出た廃材でカウンターを作り、裏山の竹でランプシェードを作り、里山にある資源を使う暮らしをもう一度みんなで作っていきました。今年の春に飲食営業の許可を取りカフェを、夏に宿泊営業の許可を取り宿泊ができるようになりました。

ここでは *awanova* というオーガニックマーケットを新月の日で開催しています。地域の仲間たちが生産者として、つまり農家であったり、お菓子を作る人だったり、コーヒーの焙煎家だったり、いろんな仲間が月に1度のマーケットを開いています。あわ焼と言って、田んぼの土で陶芸をしている西山光太さんの作品もあります。彼とも連携して、棚田オーナー

制度や無印良品鴨川里山トラストのイベントでは自分たちでマイぐい呑みやマイ茶碗を田んぼの土で作っています。今年の春には棚田ファッションショーも開催しました。これは、エシカルファッションデザイナーの鈴木ひろみさんという方がこの活動に賛同してくれて実現しました。地元のおばあちゃんたちも来て楽しんでくれました。服も文化も、生きる力、喜びを与えてくれる。僕たちは棚田の村で新しい文化を作りたいと思っています。宮沢賢治の農民芸術のように、これはつらい労働ではなくて、美しいことなんだ、楽しいことなんだって、そういう新しい文化を作りたいです。



写真5 「古民家したさん」で毎月開かれるオーガニックマーケット awanova (林良樹提供)

この「土に還る家」として再生された古民家には「古民家したさん」という名前がつけられましたが、僕個人の所有ではなくてコモンズとして、コミュニティの所有にしようと考えました。そのため、「小さな地球」という一般社団法人を作り、その法人の所有にしたんです。先程、アマゾンの先住民族のお話がありましたが、僕は若い頃アメリカの先住民スー族の村に滞在したことがあって、非常に影響を受けました。スー族の人たちは国家や所有という概念がなかったんです。君のものはみんなのもので、皆のものは君のものだよと教わりました。僕は、もう一度この大地を、家や山をコモンズにして、地球に返そうと思っています。僕が死んでも、この広大な日本の原風景や共同購入した土地は、これに価値があると思う

コミュニティが引き継いでいく。これは一つの大きな社会実験でもあると思っています。

本当に多様な人たちが基金を拠出してくれました。僕たちは、この「古民家したさん」というコモンズを一つの舟に見立てたんです。今の社会は持続不可能なので、持続可能な社会という未来に向かうこの日本の原風景を一つの舟に見立てようと。このビジョンに賛同するいろんな人たちが協力者としてこの舟に乗って漕いでくれました。

茅葺再生も始まりました。つい先日、茅葺合宿が終わったばかりです。2年前の台風で被災した時に、僕は茅の声を聞いたような気がしたんです。「循環のシンボル、茅葺が残っているというのは、僕たちの社会はまだ間に合うんだよ」って。昔は村の結（ゆい）によって行われていた茅の葺き替えを日本中に呼び掛けて現代の結を作ろうと思いました。そのためクラウドファンディングを立ち上げました。日本中から茅葺合宿に集まってくれました。2週間の合宿で、延べ200人以上です。デンマーク人やドイツ人、韓国人もきてくれました。グローバルな現代の結によって人が集まり、資源はローカルで循環させるという、新しい社会の小さな芽を見るようでした。これは、ただ屋根の再生だけではないと思っています。人と人とのつながりの再生であり、社会の再生であり、人間の再生であると思っています。しかも参加者の半分以上は若い女性でした。女性がどんどん活躍する時代だとすごく感じています。合宿には、神戸で株式会社「くさかんむり」を営む人が協力してくれました。日本のトップクラスの茅葺職人ですがまだ40代なんです。海外の茅葺職人とも交流する非常に視野の広い人で、この活動に賛同してくれました。

今後どぶろく特区も取ろうと思っています。敷地全体は森の幼稚園として子どもたちに開放しています。また、コロナ禍で移住希望者がすごく増えているので、移住者のための住宅として里山長屋も計画しています。空き家になった「古民家けいじ」には、活動に賛同した赤ちゃん連れの若いご家族が横浜から越してきて、循環型の農園と2地域居住の拠点としてタイニーハウスビレッジを作っていこうと一緒に計画しています。もう1軒の「古民家じいだ」には和太鼓グループTAWOO（タヲ）のメンバーが移住してくれて、ここで太鼓の里を作っていこうと計画中です。こうして多岐に渡る活動が始まりました。

今、日本中の地方が疲弊しています。地方を再生していくには、都市の力を借りていくことが僕は非常に重要だなと思っています。そしてみんなで成長から成熟社会へ、という時代を迎えたいと思っています。他の国々から収奪するのではなくて、足元にあるものを活かしながら、人と人、人と自然、都会と田舎、暮らしと社会、わたしと地球、そういったものをもう一度つなげたいと思っています。近代社会が分断させてしまったものをもう一度つなげたい。昔に戻るのではなくて、新しい未来を作りたい。そして暮らしと社会に「小さな地球」を表現したいと思っています。それは循環です。人の循環であり、資源の循環であり、経済の循環であり、都市と地方の循環。そういう循環を僕らは暮らしと社会に表したいと思って一般社団法人の名前を「小さな地球」と付けました。

これは誰か特別なリーダーがやるのではなくて、皆一人一人に役割がある。一人一人が当

事者であり、主役であり、リーダーであると思っています。僕は一応この会の代表ですが、リーダーではない。みんながそれぞれ自分のやりたいことを自分らしくやる。そういった視点で生きれば、すべての人がアーティストだと僕は思います。自分の人生を通して、生活を通して、生命を通して、より良い人生とよりよい社会を創造することができると思います。僕はそれを棚田の村でやろうと思っていますが、東京にいる人は東京でもできるし、ブラジルにいる人はブラジルでもできるし、どこでもそれはできる。そういう一人一人の暮らしからはじまると思っています。

人間と自然との関係を見つめ直す

下郷 近代になって村の景色がめまぐるしく変わっていったわけですね。里山に暮らしていると、人間社会の価値観が移り変わっていく速度と自然が時間を刻む速度がいかに食い違っているかをすごく実感します。例えば、木が芽吹いて育つには100年、200年、樹種によっては1000年とかの時間の流れ方があるわけですよ。

長老たちの話を聞くと、昔は村があり、その裏手に里山が広がり、茅や薪を取ったり、炭を焼いたり、落ち葉を集めて堆肥にしたりして山に人の手が常に入り続けていた。それが燃料革命の到来で薪や炭の需要がなくなってしまった。高度成長期には製紙会社がパルプ原料を買い付けに来て、里山の広葉樹を皆伐した。戦後の杉の拡大造林政策でも広葉樹の森を杉の植林地に変えた。また、この地域一帯では柑橘類の栽培が奨励されて、やはり山の斜面の広葉樹林を切って柑橘栽培に切り替えた。でも、そうこうするうちに国は政策転換して、木材の輸入自由化、オレンジの輸入自由化に踏み切った。安い物が外から入ってくるようになって、ミカンも国産材も売れなくなってしまったと。

いま山を歩くと、杉植林地の中にまで竹が侵入して荒れ果てていたり、真っ暗な藪みたいな森の中に古いミカンの木が立っていたりするのを見ますが、現代の人間社会の価値観の変化って、すごいスピードじゃないですか。でも自然って、そういう人間の時間のリズムと全く違う次元で時間を刻んで生きているわけですよ。

人類の目まぐるしい価値観の変遷の中で、自然に手を入れて傷つけて、はい次の価値観がやってきた、で、また傷つけることを繰り返してしまい、自然が回復する速度に全然追いついていない。人間の価値観で使い捨てしてはいけないものまでを使い捨てし続けてきた。その矛盾は溜まるいっぽうです。こうしたやり方はすでに破綻しているということはみんなわかっているわけです。まさに今イギリスのグラスゴーで COP26、気候変動の国際会議が開かれていますけれども、見直さなければいけないということが、ようやく言われている。私たちがまた生物として、自然がなければ生きていけない。私たちが刻む時間のあり方を考え直さなければ、私たち自身がそれこそ生き延びていけないのではないかとすごく感じています。

さらに、一極集中の問題があります。例えば東京という大都市に富も情報も人もすべてが

集中していく、お金がたぎ込まれていく。地方は衰退していく。地方の文化も衰退していく。でも人も文化も多様な存在であるはずで、主流の一極だけに集中すればいいということではない。そうではなくて、色んなまぜこぜな世界を見つめ直さなければいけないんじゃないかと思っています。

アマゾンの森林火災の問題が日本でも盛んに報道されましたが、アマゾン熱帯林の破壊の要因は穀物栽培をはじめとする大規模農業開発や地下資源開発です。日本もブラジルから大豆やトウモロコシ、アルミや鉄をたくさん輸入しています。アマゾン先住民族の大長老、ラオニが私に言った言葉が忘れられません。「日本はあんなに小さな島国だから耕す畑もないのだろう。だから遠いアマゾンの森を壊してまで作る大豆が欲しいんだね」とラオニ長老は言いました。でも毎回アマゾンを訪ねて日本に帰国して、鴨川の村に戻るたびに、見回せば耕作放棄地がたくさん広がっている風景が、荒れた里山の風景が待っているんです。

そして同時に思うのは、日本の里山の大地の豊かさです。アマゾンと言えど世界で最も生態系の豊かな場所というイメージあると思うのですが、土壌はひどく痩せていて、森を壊せばどんどん砂漠化してしまいます。いまアマゾンは乾期には気温が50度、湿度が10%台になるほど乾燥化が進んでいます。そういうところから帰ってきて鴨川の里山に立つと、穏やかな気候、豊かな土壌と水があり、大地に何を蒔いても実りがある、こんなに豊かな土地に耕作放棄地が広がり、輸入した方が安いという理由で海外から食料を輸入する、その限界が来ていることをひしと感じます。

では、私たちはどんな社会が欲しいんだろうか。林良樹さんの話にあったように、自分の人生をどんなふうデザインしていくのか、どんな生き方がしたいのかということを考えたい。安さや効率を第一にするならば、日本の農村は見捨てて、すべてを都市に集約させて、必要なものは海外から全部輸入すればいい。でも、それでいいのか。私たちは腹が膨れさえすればいいのか。そうじゃないですよ。それで私たちは幸せなのか。生きることは文化であるし、効率や経済の指標ではかかれるものではない。そういうことをすごく感じています。

林 人生の豊かさとか、暮らしの中にある美しさとか、人間らしい喜びだとか、そういったものが、この村にはあるんです。この村はすごく美しいんですよ。この美しい景観は原生の自然ではなくて人間が手を入れた自然です。そこに美しさを感じているし、その美意識は、たぶん世界共通だと思う。この地域は外国人の移住者も多いのですが、「この村は歩いていだけで物語を感じる」と言われます。そういう美意識は、僕らは長老から教わったんですよ。長老たちが行ってきた田畑の管理や道具の管理は、僕にはアート作品のように思えるんです。無名のお百姓さんたちが培ってきた美意識、それこそが僕は文化だと思っています。

僕はそういったものを引き継いで、現代の人に翻訳しながらお伝えしていきたい。循環型の暮らしが進んでいけば、日本の風景が美しくなり、その風景を見た人は気持ちが豊かになって、さらにそういう場所が広がっていく。そうすることで社会は持続可能へと、収奪型か

ら循環型の社会へと変わっていき、そして地球全体が平和になっていく。そういうビジョンを僕は持っています。ここは棚田の小さな村ですけど、ここでの活動が広く社会や世界にまでもつながって影響を与えることができると僕は思っています。

市長や知事と対話する機会を持つこともあります。この課題を共有して一緒に解決していきたいです。特区制度を活用し、法律を変えていくこともできると思っています。法律は僕らが豊かに生活するための一つの道具なので、皆で知恵を絞ってやっていきたい。行政や大学や企業、それぞれ得意分野が違う人たちとつながることで、新しい化学反応が起きると思っています。大きな課題を小さな暮らしの現場から一つ一つ小さな答えを見つけていき、そして実現して、それを広げていきたいし、それができる時代だと思えます。

以下、Q&A より

昔に戻るのではなく、新しい共同体を作るという意味

林 古い村社会は窮屈なところもあって、たとえば村の寄り合いでは女性に発言権がないとか、女性はほぼ発言しない。相変わらず男性社会でタテ社会。これからは女性がどんどん発言して、地域づくりに参加できるような、オープンなコミュニティになっていけばいいと思っています。僕のやっていることは開かれた場作りの活動ですが、保守的な村にはなかなか他者が入れないところがあります。でも僕のような都会と田舎をつなぐパイプ役がいれば入ることが可能になります。村の共同作業も今は大学や都市住民と一緒にやっていて、村の草刈りにも大学生たちがしょっちゅう手伝いに来てくれます。そういう意味では、ここはコモンズとして守られる、共有されることによって村も守られるし、都会の人にとっても救われる場所になっている。今回の茅葺合宿もそうですけど、新たな共同体の意識、価値観、豊かさを共有するという点で、新たな共同体が生まれているという側面があります。

なお、伝統的な生業の根本にある生活文化を引き継ぐ基盤の大切さという点では、ここは棚田の村なので基本は稲作で、それは変わらないです。四季折々の営みとして1000年来続く営みがベースです。それを引き継ぎながら、中身や関係性は変わっていくという感じでしょうか。

外部から学者や専門家が関わることに対する現場の期待

林 僕は現場のど真ん中にいる立場の人なので、外から色んな専門家が来て、僕の伝えられない表現を学者の人が専門的な表現で社会に提案してくれることで、一緒にここの価値を社会で認めてもらえるようになる。そんなことをしてもらえると助かります。

下郷 この場で何をするか、何を学問するのかというのが、ここに通って来られる方々の目的だと思いますが、通うプロセスそのものにもすごく意味があると思っています。それは私たちのような移住者が感じて学び取ってきたこととも重なります。観光客として遊びに来

の暮らすのとは、まったく違いますよね。その中間に位置する、つながりを持った場所に通うという、そういう立場もあるわけで、そこから見えてくるものもすごくあると思います。

例えば関東大都市圏から房総半島南部の方に来るにはアクアラインで東京湾を渡ってくるわけですが、高層ビルが湾岸沿いにワッと建ち並ぶところを抜けて、アクアラインを通って房総半島に着いたとたん、丘陵が広がり、里山の風景が広がり、荒れ果てた竹藪なんかも広がっている。そして、山がごそっと半分削り取られた山砂採取場が車窓の両側に次から次と見えてきます。

都市を建設するには砂や土が必ず必要で、羽田空港の拡張工事や東京湾の埋め立てにも大量に使われている。ではそれはどこからきているのか。東京という町は房総半島の山を削って作られているんだということの実感は、暮らしてみても初めてわかる。じゃあその山を売り渡した人は、どんな事情で、どんな思いで山を提供したのか。そういう苦しい事情や思いは、つながりを持った場所に通い続けることでわかるんです。

単に頭で理解するのではない、肌感覚で分かる。頭だけで勉強していると、物事をズバッと裁いてみせるみたいな思考に陥ってしまいがちだと思います。例えば、開発か保護か、さあどっち、みたいな単純な二項対立的な考えに陥ってしまいがちです。そうではなくて、まずとにかく見る、肌で感じる、矛盾だらけのさまざまな事情をまず自分の中に落とし込んでいく。そこから新しいものが生まれてくるのではないのでしょうか。だから都市農村交流や大学の学問を通して農村に通ってきてくれる人たちが、「通う」というプロセスの中から何を学ぶかということも、すごく大事ではないかと思います。

林 大学の先生がここに通うことで、先生自身が変わっていつている。先生が少年のように子どもにかえて、学生たちも1年通って、僕人生変わりましたって言います。自分たち自身が解放されて、みるみる変わっていく。

このほか、エネルギーのこともやりたいと思っています。今は薪とか炭ぐらいしか作ってないですけど、小さなエネルギーに取り組みたい。一つはソーラーシェアリングです。畑に太陽光パネルを設置して木漏れ日の下で作物を作り上で電気を作るという仕組みですが、休耕地への設置を可能性として考えていて、ソーラーシェアリングの会社の人と今、意見交換をしています。さらに、高齢者の分野。今、東工大と一緒に里山住宅を計画していますが、将来は高齢者のためのデザインも取り入れていきたいと考えていて、将来は僕もそこでお世話になろうかと思っています。暮らしの中で人生の最期を全うする、そういう場所を作っていきたい。福祉と教育、そしてエネルギーを、たとえ全部ではなくても、この小さなコミュニティでできるような仕組みを将来に向けて考えています。

茅の再生の課題と伝統的職人の育成

林 この茅葺プロジェクトはとりあえず3年計画ですが、10年くらいかけて、かつてあった茅葺きの結の形を復活したいです。昔、この村では25世帯が協力して毎年1軒の葺き替えをしていたと長老から聞きました。関東エリアでそういう25世帯ぐらいのネットワークができれば、そこで現代の結を作ってお金がかからずに茅葺屋根を維持することができる。やってみたい、茅葺を学びたいと言っている20代の若者が何人もいて、女性も何人もいます。茅場も残っているところがあり、やりたいという結のネットワークもある。だから、これは夢物語ではないと僕は思います。今回の茅葺合宿は、本当に学びたい人は来てくださいというスクールにしたんです。一緒に職人も育て、ネットワークも育て、茅も育て、こういう文化を育てていこうと僕は思っています。

茅葺合宿では、こんなことを言ってくれた女性がいました。「茅葺の再生だけではなくて、人と人とのつながりにすごく救われた、だから人間の再生だったんだ。近代は全てが効率性で、お金で解決して、産業界にすべてを任せてすればいい、それで成長させて経済を回してきたけれど、捨てちゃいけない物まで捨てちゃった。それをもう一度この茅葺合宿で思い出しました。」

.....

おわりに

景観は素晴らしいが里山には課題が山積している。それを一つずつ解決しながら新しい未来を展望する。台風一過、「缶詰」にされていた茅葺が林さんに示したのは、効率性を優先させずに、共同体での時間や自然との関係にある価値の大切さであった。こうした価値を理解する様々な人々との関係を育てることが里山の保全にもつながる。農村都市交流についても、「都市の消費者の顔を農村に見せに行く」(下郷)という動きも必要で、そうした顔の見える関係性を作る場として里山コモンズとしての古民家再生プロジェクトがあった。

林良樹 (はやし よしき) (NPO 法人うず代表理事、一般社団法人小さな地球代表理事)

下郷さとみ (しもごう さとみ) (ジャーナリスト)

第3回
内山節 講演会
「現代的共同体のデザイン」
講演録²

開催日：2022年1月19日

講演者：内山節（哲学者・NPO法人森づくりフォーラム代表理事）

1. はじめに

群馬県の上野村という山村にも家がありまして、上野村と東京を往復するようになって、もう50年くらいになります。今日は共同体とは何か、これからどうあったらいいかという角度で話をさせていただきます。

この2、30年の間に共同体への関心はずいぶん高まってきました。以前は農山村などではいかに共同体を解体して、市民社会を作るかというような議論が中心だったのですが、いつの間にか共同体をどう守るかという議論に変わってきています。都市部でも、新しい共同体が作れないかという問題意識をもちながら、地域活動などをやっている方が大変多くなったという気がします。それがなぜ起きてきたかという、今日は結構格差社会ですから、生活が大変な方も結構たくさんいらっしゃるんですけど、一応生活のほうはそれほど苦労してないという人間の場合でもですね、何となく自分が生きているという存在感が薄くなってきたというか、日本というシステムの中で振り回されているような感じから生まれてきたように思います。経済というシステムの中で、あるいは世界というシステムの中で振り回されているような感じでもある中で、もう一度存在感のある生き方を回復したいという気持ちが広がってきているのではないかと。どんな関係を作っていったら存在感のある生き方ができるのかという思いが広がってきているのだろうという気がしています。関係の中には、精神的な関係も、身体的な関係も、霊的な関係もある。霊的な関係というのは、精神的でも身体的でもないが、何かつながっている世界、そういうものを司るような捉えどころのないもの、という意味でここでは話をしてみようと思います。

2. 共同体とは何か——過去の共同体論の誤り

最初に共同体とは何かということを振り返っておこうと思います。19世紀にヨーロッパで出て来た共同体論、それを代表するのがテンニエスの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』という本だったと思います。ゲマインシャフトを共同体、ゲゼルシャフトを市民社会と

² 2021年1月19日の内山節先生の講演内容をもとに幡谷則子が編集した講演録。最後の項には、講演後のディスカッション内容の一部を反映させている。

いう風に大雑把に訳してしまえなくもないのですが、テンニエス自身はもう少し複雑な意味合いでこの言葉を使っています。ゲマインシャフト的なものが解体されて、ゲゼルシャフト的なものに歴史は移行するという。ただし、テンニエスは、ゲゼルシャフト的な社会が完成すると思っているわけではなくて、ゲゼルシャフト的な社会もまた問題点があり、次の段階としては、両者を融合させたような新しい社会ができていくべきだという視点です。といっても共同体とか市民社会とかを歴史の発展論の中で語ったというのが19世紀的だと思います。

20世紀になると、共同体論でもこの19世紀的な理論を引きずってきたものがたくさんあって、日本では代表的なものとして大塚久雄の『共同体の基礎理論』という本が戦後すぐに出ています。大塚さんの共同体論というのは、共同体というのは封建的で自由がなく、さらには自然と人間が強く結ばれているというのも人間が自然から自立していないからだ、人間が自然に支配されている、という捉え方をしている。まだ文明が成立していないというような雰囲気でもあって、それをいかに解体して近代的な市民社会にするのかという19世紀的問題意識をそのまま引きずったような共同体論であったということになります。

ところが20世紀に、画期的なものとしてはマッキーヴァーという、イギリス生まれでアメリカの大学で教えていた社会学者が、『コミュニティ』という本を出しました。おそらく「共同体」という言葉自体が「コミュニティ(community)」の訳語なのだろうと僕は考えています。というのも、江戸期の文献に「共同体」という言葉がない。むしろ「コミュニティ」をどう訳すか。そこで「共同体」という訳し方をしたのだろうという気がします。ちなみに江戸期までの「共同体」を意味するような言葉としては、単に「わが町」とか、「わが村」とか、あるいは「わが集落」などはありましたが、そういうようなものを総称して「共同体」と言う使い方はなかったと思います。

マッキーヴァーの『コミュニティ』という本は、どんな時代になっても、コミュニティは必要だという立場で書かれている本です。古代から遠い未来に至るまで、常に共同体は必要になるという視点でした。ここらあたりから現代コミュニティ論に移ってきます。私たち自身が今、「共同体」とか「コミュニティ」を語る場合は、やっぱりマッキーヴァー流で、どの時代でもこういうものは必要なんだという視点で語っているように思います。

・共同体に型を求めることからくる問題

僕も実は大塚久雄さんと全く同じ題名の『共同体の基礎理論』という本を書いているのですが、共同体とは何かと言われると、非常に困るんですね。というのも、共同体というのは、一貫してある形があるわけじゃなくて、歴史的に変化した。だから多分縄文時代や弥生時代それぞれの、古代以前の共同体もあったでしょうし、中世的なものもあったでしょう。ただ私たちが今史料的にみて、これが共同体の原型だろうとみているのは、江戸時代の、近世の共同体です。ひとつには、江戸時代の共同体の時代になると、いろんな文献が残されてい

ること、もう一つは、江戸時代にできたいろんな習慣とか考え方は案外今日まで受け継がれている面もあるため、現在の村の在り方を見ていくと、江戸時代の共同体はこういうものであったのではないかなど、ある程度推測がつくからです。しかし歴史的には変わってきますから、何をもちて共同体とかというのかというの、形を見ようとすると、いろいろ変化してきたとしか言いようがないし、さらに言うと共同体というものは地域共同体だけではないわけです。農山村社会の共同体もありますが、一言で農山村社会と言っても、農村社会と山村社会ではかなり違ってきますし、さらには農村社会も稲作が中心の農村と、非稲作的なものが中心の農村では、いろんなものが大きく違う。それ以外にも漁村の共同体、さらには商人が作っていく共同体とか職人が作っていく共同体とか、いろいろなものがあるので、そのどれをもちて共同体の原型とか、などという議論をしてしまうと、変なことになってしまいます。

3. 共同体は自然と人間の社会として作られる

日本の共同体を軸に考えていきますと、共同体というのは、決して人間が作っている社会のことではないわけで、あくまで自然と人間が作る社会というものとして共同体がある。共同体のメンバーには、自然が含まれているというのは一つの特徴です。さらに、人間というのは、生きている人間だけを指すだけではなく、亡くなった人、その地域の先輩たち、あるいはその職業の先輩という人たちも共同体のメンバーなんです。そこに日本の場合には、神仏が共同体のメンバーとしてかかわってきました。ですから、日本の共同体というのは、自然と生者と死者と神仏によって構成されている共同体として形成されてきたのです。

僕は生まれが東京なので、家系図的に言えば上野村では僕が一代目という感じです。僕が今住んでいる家は、ある時譲ってもらったものですが、その譲り渡しが終わるとその日から暮らせるんです。家まで電気も道も、水道もきていますし、その日から暮らそうと思えば暮らせる。ただそれができたのは、長い歴史があつてこそなんですね。今は家があると家の軒下までは電力会社が電気線引っ張ってくれるという仕組みになっていますが、以前はそうではなかった。今ある電気ケーブルのある場所から自分たちの集落まで、自分たちでお金を出して引っ張ってこなければいけなかったんです。小さな集落でしたから、今的に言う有一家あたりの負担金は、300万とか400万とかになったりするんです。それぐらいの負担金をみんなで出しあつて電気を引っ張ってきた。村には集落に共有の神社があり、そこに立派なヒノキの木がありました。天然のヒノキですから、当時一本何百万円みたいな木なんですけども、そういうものをみんなで共有財産としてもちていて、その木を切り、その代金で電線を引っ張ってきたらしいです。昔はそうやって電気を引っ張ったり、水道も自分たちで作ることもあつた。僕の家水道は、伝承によると、弘法大師が発見した湧き水が水源だということになっている。その水源は山もかなり奥からずっと引っ張ってきているんです。最後は、各家に水道として送るという仕組みになっているわけですけど、それを作ってきたのも、昔

の人たち。もちろん道もその人が作っていったわけです。さらに、僕の家もわずかですけど畑もあるので、その畑もそれが使えるようになる過程では、昔の人たちが、ずっと畑として使いながら、だんだん良くしていったという歴史があるわけです。今ここで自分たちの暮らしが成立するというのは、過去の人たちの営々たる努力の上に成り立っている。だから、今でも過去の人たちが消えてしまうというよりも、一緒にこの村を守っていると強く感じられるという。田舎にいと、そういうところが感じられます。

自然と生者と死者と神仏が共同体を作っているという時は、その4者が話し合っ作っているわけではなく、自然との関係が村を作っている。そして生きている人間同士の関係が村を作っている。さらに、もうなくなっているけれども、村の基盤を作ってくれた先輩たちとの関係が、今でもこの村を作っている。そして村には、宗教とはちょっと違うような形で、神仏が祀られていて、そういうものと関係を結びながら村をつくっているのです。

だから、山の神と関係を結んでいたり、水の神と関係を結んでいたり。そんなことをしながら村ができているという、そういう世界です。ですから、共同体というのは、決して伝統的には人間だけの社会ではなかった。

これは職人とか商人とかの共同体になっても似ているところがある。ある時、地域で昔から続いている農村の鍛冶屋さんに話を聞きにいったことがありますが、そこでも少し広範囲な地域で鍛冶屋の共同体を作っていて、そこには鍛冶屋の親方がいて、そのもとに、独立した職人さんたちがいる。そうすると、その人たちは、毎年お正月には親方の家に集まり、まず神仏に、お祈りをする。だけどその神仏とは、金山姫を祀っていましたが山の神なんです。つまり、山の神の世界から鉄ができてきたのです。そしてそれが自分たちの工房に運ばれて、さらに加工されて、農具になったり、刃物になったりしていくという。だから、農村で農業をやっている人たちのように、日々自然と結んでいるわけではないけれども、やはり自分たちの世界は自然とのつながりの中に成立しているという思いはあるし、鍛冶屋であれば、鍛冶屋の技を作り上げていった先輩たちと自分たちの関係というのもやはり存在する。そこに、自分たちの神仏を祀って、という世界でもある。こうした人間と自然、先輩たちと神仏との関係のもとに職人の共同体が成立していたということがわかってきます。

・江戸期の共同体について——多層的共同体

江戸時代の共同体を見ていくと実に色んなものが積みあがっている。都市の一般庶民の生活では、長屋というのが一つの共同体です。長屋の住人がお互いに助け合って生きている一面がある。ただそれだけが全てではなく、職業別の共同体というのも非常に強いものがありました。火消しの共同体は本当に強かったですし、大工の共同体とかいろんなものがありました。

江戸の街の特徴としては、全国から人が集まってきた町であったこともあり、出身地別の共同体というのも非常に強固にできていて、仕事の斡旋などは結構ここがやっていました。

さらにお寺の檀家さんの共同体があつたり、神社の氏子さんの共同体があつたりする。

このほか江戸期の特徴としては、山岳信仰（修験道と言い換えてもよい）が広がっていて、それを信仰する人たちが講組織を作り、共同体的に助け合いをやっていました。この修験道的な講組織というのは明治5年に修験道禁止令によって潰されたのですが、江戸時代には非常に広く広がっていました。江戸の街を見ていくと一番多かったのは富士山信仰。修験道系のものというのは、自分たちで信仰する人たちが講というだいたい30人ぐらいの組織を作り、講として、山に行ったり、お参りをしたり、日々の様々なことをしていました。

ですから、共同体というのは一つだけにまとまっているわけではなくて、実に多層的に形成されていた。例えば、長屋の共同体にも加わっているし、職業別共同体にも加わっているし、出身地別の共同体にも加わっているし、檀家や氏子の共同体にも加わっているし、山岳信仰の共同体にも加わっているというように、いくつもの共同体にひとりの人間が加わっていたのです。

4. 小さな共同体の集積が共同体的社会となる

僕は須郷という名の、小さい集落に暮らしていますが、ここは本当に数軒しか家がありませんので、数軒で大きな家族をつくっていると言いたくなるぐらい密接な関係が出来ている。だからこれも一つの共同体です。しかし、江戸時代の上野村というのは、いくつかの自然村がありました。自然村とは、だいたい歩いてコミュニケーションが取れるぐらいの広さで自然にできた村です。僕のところは檜原村という自然村だったんですが、そうすると檜原村的な共同体もあるし、さらに上野村としても一つの共同体を形成する。このほかには檀家さんの共同体、氏子さんの共同体、職業別の共同体があつたり、というようにいろんなものがある。そういうものが集積して行くと、そのことによって、社会全体が共同体的社会になっていく感じです。だから、共同体というのはある一つのものであれば、それが共同体という性格という訳ではなく、小さな共同体がいっぱいあり、その小さな共同体が積み上がっていく関係によって生きている世界、あるいは助け合いながら生きている世界みたいなものができてゆく。すなわち共同体というのは、その意味では二重概念なわけですが、小さな共同体が共同体。だけでも、それが積み上がっている状態はまた共同体。そういう性格を持っていると考えなければいけないと思います。

その点では古い共同体理論は共同体というものを一つの組織であるというように考察をしているのが普通なんです。僕自身はそれは間違いだろうと思っています。そうではなくて、いろんな小さな共同体が存在し、それらが積み上がってこそ、本当の共同体がまた存在する。そういう構造になっているのだと思っています。実はマッキーヴァーの『コミュニティ』という本はその辺のことに別の形で触れているのです。マッキーヴァーはコミュニティというものとアソシエーションというのを分けていて、アソシエーションというのは、ある目的を実現するための結合組織のことだと言っています。だから、今日的に言えば、場合に

よったら「〇〇の環境を守る会」でも良いし、あるいは宗教的な団体でも良いのですが、ある目的を実現しようとして作っている組織のことを、マッキーヴァーはアソシエーションと呼んでいます。それに対してコミュニティというのは、ここは自分たちの共有された世界だということを感じようになった時に生まれてくるものだと彼は言っている。だから、コミュニティとは作ることができない、生まれてくるもの。ここは我々の共有している世界だという感覚が出てきた時に生まれてくるんだという、そんな言い方をマッキーヴァー自身はしています。では生まれてくるのをじっと待っているのかというところでもなくて、アソシエーションを、たくさん作り出すことによって、コミュニティが生まれてくるのが早まるという、そんな位置づけをしているんですね。僕自身は、このマッキーヴァーのアソシエーションとコミュニティを分けて捉えるという必要性はないのではないかと考えていて、むしろアソシエーション的なコミュニティもあっていいし、生まれてくるコミュニティがあってもいいし、むしろ、その小さなコミュニティが積み上がって、その時に全体的にコミュニティの社会が出来上がっていくという、そういうことではないかなと思っています。

僕は専門が哲学ですから、共同体というのは、二重概念なんだという言い方をしています。小さな一つずつの共同体があって、大きな全体としての共同体があるという、そういう二重概念でいいのではと思っていますのですが、これは今の学問の中心である〇〇科学という世界では通用しない論法です。だいたい今のコミュニティ論というのは、社会科学系の人たちがやります。そうすると科学の手法を使っていこうとすると二重概念なんていうことはありえないわけです。だからマッキーヴァーはアソシエーションとコミュニティをしっかりと分ける必要性があったのだらうと思いますが、僕の方から見ると何も分けなくてもよい。

マッキーヴァーのいうアソシエーションというのはだんだん活動して行くうちに大きくなっていくものもあるし、逆に、小さくなっていくものもあるし、更には消えてしまうものもあるし、あるいは二つに分裂してしまうという可能性もある。つまり、いろんな動きがあるんです。僕が言うところの小さなコミュニティ、小さな共同体も同じで、だんだん大きなものになっていく場合もあるし、逆に小さくなったり消えていくこともある。それから組織のあり方としては、非常にしっかりした組織を作っている場合もあるし、緩やかな組織を作っている場合もあるし、あるいはしっかりした組織だったのが、だんだん緩やかになっていくという場合もあるし、その逆の場合もあります。そういう変容を絶えず行ないながら、それらが積み上がっていくと、一つの共同体、社会が出来上がっていく。

今、共同体を作らなければいけないとか思っている人たちも、古い共同体概念にとらわれている場合があって、共同体の形を一生懸命探すんですね。ですが探する必要なんか全然なくて、本当に緩やかなものでも良いし、目的によっては非常にしっかりしたものを作らざるを得ない場合もある。だけど、一つの組織をなんか作ったら共同体ができる訳ではなくて、そういういろんなものを積み上げてこそだという、そういう視点が必要だと思います。さら

に、そういう色々な物が出来上がっていく過程の中でそこに加わるメンバーも絶えず変容している。だから、しっかりしたひとつの組織っていうと、しっかりした町内会みたいなものになってしまうわけで、かえって窮屈であると言っても良い。もっと自由度の高いものの中で自分自身もまた絶えず変容していくような、そういうものこそ本当の共同体であるという気がします。

・共同体での意思決定

ところで、日本の伝統的な共同体では、実は意思決定は満場一致しかないんですね。多数決はとらないのが特徴です。なぜ多数決を取らないかと言いますと、共同体のメンバーというのは永遠にメンバーであり続けるという、そういう気持ちが強いです。従って、共同体と単なる組織の一番の違いは何かというと、共同体はメンバーに何らかの事情で困難を抱えた人が発生した場合に、その人を無条件で助けるという共同体の特徴にある。ですから、病人が出ればみんなで応援するし、生活に困窮してもなんとかやっていけるように、みんなで応援するし。常にそういうふうに、何らかの応援をしながら、自分たちのメンバーは無条件で助ける、それが共同体なのです。単なる組織になりますとそういうことが起きても、どうもあの人は大変らしいなんて話をして終わってしまう。共同体的組織は、みんなが絶えず助け合って生きていく姿勢を持っていなければいけない。多数決をとるということは、少数派が出ることになってしまいます。少数派の人たちを出してしまうことによって、禍根が残ることを嫌がるということです。つまり、自分が問題提起したんだけど否決されたとなると、自分が間違っていたから否決されたとは思わず、わだかまりが出てくる。そういうことが出ることを防ぐために、常に満場一致で物事が決められる。それが共同体のルールです。

上野村で寄合に出ていたとき、あるお年寄りから、お寺の扱いについての問題提起がありました。その集落の人たちは、みんな一つのお寺の檀家さんなので、自分たちの寺という位置づけで、みんなして支えてきたのです。昔はいろんな採れたものを出したりして支えてきたんですけど、今はみんなでお金を出し合って支えている。そして、それを辞めようという提案があった。そのお年寄りの方がいうのは、今の住職さんはもう村からいなくなって、村のお寺としての役割を果たしてない。だから、そのお寺を個人が支えるのはいいけれども、集落のお寺として支える必要性はないという。それに対してほかの人たちは、この爺さんの言い分はもっともだなと思いつつも、何も事を荒立てなくてもいいんじゃないか、今までどおりでもいいんじゃないかという感じだったんです。ところが爺さんがこの問題については折り合いはつけられないという発言をしました。折り合いがつけられないということは、まとめることは無理という意味です。そうしたらその年の集落の代表が、「ただいま折り合いがつけられないという発言がございましたので、これについては今後一切議論をいたしません」と言う。よって、今までどおりお金を集めてお寺を支えるやり方は今後一切行いませんと言う。つまり何の多数決も取らずにあの爺さんの言い分が通ったわけです。

それはみんなが爺さんの言い分もっともだなど思っていたということもありますが、それだけではなく、折り合いを付けられないことについて決定はできない、決定ができない以上、すべての今までの取り決めはチャラにすることなんです。だから結果的には爺さんの言う通りになった。決して多数決で多数派と少数派を作ったりはしない。それが共同体の意思決定のルールでもあるんです。

5. 「高齢者問題」と「Aさん、Bさん問題」

今、農山村はどこでも高齢化しているんですけども、上野村も40%強ぐらいの高齢化率です。それなのに、上野村に居ると高齢者問題がないという感じがするんですね。高齢者はもちろん多いし、その中でも、体を悪くしている人も当然いますから、そういう意味では高齢者問題はあるはずなんですけれど。ただなぜないと言ってしまうかと言いますと、上野村の社会では、高齢者問題ではなくて、「あのAさんが今大変」とか、「Bさんが大変」とかそういう問題なのです。それはAさんが高齢者じゃなくてもいいわけなのです。例えば、高齢者のAさんが腰を悪くしてちょっと生活が大変になっているというケースがあった場合でも、今度は若い人が仕事にけがをして今生活が大変になっているという場合も、同じことなんです。つまり、Aさんの問題が発生したり、Bさんの問題が発生したりする。それをどうやってみんなして支えていくかということなのです。

それに対して高齢者問題というのは、高齢者を数で把握するから発生する問題という意味になります。そうすると東京にあるのは高齢者問題なわけです。今、東京の高齢化率は厳密にはわかりませんが、おそらく2割台ぐらいになっていると思います。2割だとしても、200万人とか300万人とか、そういう数の高齢者になってくるわけで、そのうちの例えば10%が体の調子が悪いとか、あるいは認知症になってきているとかという場合、そのために、その人たちが入れる施設の数がどれだけ足りないなどという問題になってくる。だから全部これは数の問題なんです。上野村にくるとこの高齢者を数で把握する必要性は全くなくて、Aさんがちょっと大変とか、Bさんがちょっと大変とか、絶えずそういうことでしかないのです。だから、上野村では、Aさん問題、Bさん問題という話なのですが、東京に来ると高齢者問題になる、そういう違いがあるといつも感じます。

なぜその違いが起きるかという、上野村では、AさんもBさんも関係の中で生きているAさん、Bさんである。つまり集落という関係の中にいたり、村という関係の中にいたりするのです。さらには村の中の、小さい共同体がいっぱいありますから、そういう関係の中にいる。だから、今度はその関係を使って応援をしていくと、そこに役場も登場してくるので、役場のほうができることは、では役場でやっていこうかという、こういう話になっていく。ですから、関係の中で生きている社会においては高齢者問題が発生しないし、今度関係が切れてしまったような社会になってくると、そこでは人間が数になって、まさに高齢者問題になっていく。

・関係によって結ばれた存在

人間の存在を作っているのは関係だと僕は思っています。例えば僕の場合で言えば、上野村にいる時には、上野村のいろんな関係が僕を作っている。上野村の場合には、窓の外を見れば山ばかりな地域ですから、まず自然との関係がある。その自然との関係と言っても、眺めているような自然との関係もあれば、山菜とりに行ったり、キノコを取りに行ったりするような関係もある。僕もわずかですけど、山をもっているのです、そうするとその山の手入れもあるし、その山の木を切ったり、その一部を薪にしたりとかをすることになり、そういう関係の中にも自分がある。さらには村人同士の関係の中で自分が存在している。そういう村の中にあるいろんな関係が僕の存在を作り出しているという感じがします。

それは東京に来ては実は変わらないわけです。東京に来ると関係のあり方が変わってくる。まず、直接的に結んでいる自然との関係は、当然ながらずっと弱くなる。それに対して東京では、東京的關係の中で僕が存在する。僕にとっての東京的關係っていうのは、例えば買い物の仕方だって、村にいるときとは全然変わりますし、東京に居るときには僕の場合、仕事をするという関係が中心になってきます。ですから、東京の仕事の關係が僕を作っているという感じになってくる。僕自身がいつの間にか持っているいろんな關係が私自身を作っているという感じ。だから、私とは何者ですか？ともし聞かれたらば、それは私が、所有している關係の総和ですと、僕の場合は答える。關係の総和だから、素晴らしい關係だけで生きているわけではなく、やっぱり現実世界の中で生きていますから、本当だったらこういう關係がいいと思っても、そうばかりもやっぺられない。そうするとやはり資本主義的關係や色んな關係が入ってくる。だから、まあまあいいと言う風に人に説明できるような關係もあるかもしれないけれども、ちょっとまずいなと思っている關係もあるわけです。そういうことを含めて、僕は作り出されているという気がします。

6. 規模の拡大と關係の希薄化、システムの中での人間の記号化

ところが、大きな世界、東京的な世界でも良いし、規模の大きい世界で、そういう世界になってくると、その關係が弱まるに従って、その關係がむしろシステムに変わってくる。だから、あるシステムの中で僕が作られているっていう、感じになってくる。關係がいかにしてシステムに転じて行くか、というふうに言ってもいい。このシステムが軸になって、そこに僕が従属するという感じになってくると、僕はそのシステムのもとの一つの記号的存在になってしまうという感じがしてきます。今の現代社会というのは、それをいろんな形で作っている。例えば、僕は国民としては国家というシステムの中の一要素、一つの因子にすぎない。だから国家においては、僕は別にいてもいなくてもどうでもいいわけです。つまり、もし僕が死んでも、誰かが生まれきたり、あるいは外国から誰かが移住してきて、日本国民として承認されれば、それでいいということになる。そういうことでしかない。今の場合

は企業の中もそうで、自分がいなくなったとしても誰かが入ってきて、その仕事をすれば、システムは円滑に動いているということになりかねないわけで、そうするとそこでもシステムの一員でしかない。今のコロナ禍の社会の持っているなんとなく感じる気分の悪さというの、一つの理由はそこにあるような気がします。なぜかという、例えばテレビをつけると盛んに感染が拡大してきたとか、それを止めるためには、こういうことをしなければいけないとか、言っているわけです。しかし、あそこで語られている人間というのは、僕でもないし、あなたでもないし、誰かでもない。単に感染者という数字の人でしかないわけです。で、その感染者という数字を増やさないために、だからこうしなさいという話になるわけで、つまり僕という一人の人間が感染しないで、どういう暮らしをしていくかというのはどうでもよくなっていて、全部感染者という記号に過ぎない。だから今のコロナ禍のいろんな語られ方を見ていると、自分の話ではなくて、すでに記号化された自分を誰かが管理しようとしている感じがしてくるわけで、そこに気持ちの良くない何かがうごめいているような、そんな気がしてきます。

今日のテーマとは直接関係ありませんが、僕自身は医学的なものについてはデータは無いと考えたほうが良いと思っています。本来、人間はひとりひとり違うわけだから、体質も違うし、健康状態も違うし、性格も違います。だから、一人一人の人間が全部違うものというふうに判断した場合に、データは取りようが無いということなんです。

それは今のコロナ禍でも同じことで、ワクチンを打った私がいて、ワクチンを打たなかった私がいて、どちらの方が最終的に効果があったのかなんていう話になると、データの取りようが無い。しかし、その人間を全部同じという位置づけにして、すべての人間をいわば数量化して捉えていくというその世界においては、盛んにワクチンの有効性が働いているということです。だから、所詮、私は単に感染するかもしれない一つの記号的人間であり、何千万人の一人にすぎないという扱いを受け続けることに対して気分の悪さというか、本当にこれでいいのかなという感じがしています。

7. 小さな単位を基盤にし、システムを補助的な役割に下げる

冒頭の問題意識に戻るのですが、そういう社会の在り様に対して、居心地の悪さっていうのを感じている人たちが今かなりたくさん出てきているんだろうという気がします。だから、なんらかのしっかりした関係を作って生きていきたい。そのしっかりした関係ができてくれば、そこに共同体というものが感じられ始めていくという。そういう世界への渴望みたいなものが、現代世界の一面を作っているという感じはしています。

しかし、人間達が関係を作っていこうとすると、その単位は決して大きいものではなく、ある程度の小ささを保障しなければいけない。日本の伝統的な共同体という話になると、例えば、江戸の街にできていたような、長屋の共同体から、講の共同体とか、いろんなもの。それは、せいぜい単位としては30人ぐらいの集団というケースが多いんです。例えば檀家

さんの共同体で、もっと大きくなっていく場合はあるんだけど、むしろいくつか分裂する形で、最小単位は30人ぐらいになってゆく。そういうケースが多い。なぜかというと30人ぐらいが本当にみんなでわかり合って助け合うことができる単位だからです。それぐらい、小さい共同体を形成しているケースが多かった。さらにその上に共同体同士が連携をすることでも成立していた。例えば富士山信仰の共同体などというものも、一つ一つを見ると30人ぐらいだけでも、富士山信仰の人たちが、ある種の連携をとりながら、時にはもう少し大きな規模で動くというようなことも成立するという、そんな感じです。

だから、共同体という、仲間を決して見捨てないという組織を作って行動すると、その大きさはそれほど大きいものではない。しかし、そういうものがたくさん多様に積み上がりながら、一つの社会をつくっている。そういう共同体社会の在り様としては、もう少し大きなものになっていくということなんだろうという気がします。

こういうものに対して、今、関心が高まってくるというのは、結局、人間たちは大きなシステムのもとで生きていくことが本当に幸せ感があるのかということに今、気づき始めているからということでもあるのだろうと思うのです。

ずっと日本の歴史を見ていきますと、まさに戦前・戦中というのは日本国という、その大きなシステムの中にみんなが巻き込まれながら生きた時代でもあった。戦後になると、そういう国家主義的なシステムは、一辺崩壊はしたんだけど、その後経済というシステムが肥大化していき、そこにみんなが盛り込まれていくような形で生きていくようになってきた。常に、巨大システムみたいなものがどこかで形成されながら、そこに組み込まれて人間達が存在する。その結果として、人間が単に数字で表されるようになっていたり、あるいは単なる記号のような存在になってきてしまう気がします。そういうものを今でも追求している人もいるのだけれども、なんか違うなと思っている人たちが今、新しい動きを見せ始めてきている。そこに「共同体」という言葉が、新しい光を浴びるようになってきたということのように感じます。

・上野村に見る共同体の規模

例えば上野村は今、人口で言うと1100人ほどの村です。一番人口が多かった時期と比べますと、1/4ぐらいになっています。ただ、一番人口が多かった時というのは、実はちょっと多すぎたのです。というのも、山奥では、昔、炭焼きが盛んで、炭を焼く専門の人たちは、村外から炭を焼くために村に入ってくる人が多かった。実に炭焼きの人だけで2000人ぐらいの人達が外から入ってきていたのです。さらに戦後になりますと東京が焼け野原になりましたので、親戚を頼って疎開してくる人たちがたくさんいて、農山村がいわば過剰人口を抱えました。その時期に、今の四倍ぐらいの人たちがいたという感じです。それに対して上野村が明治になってできた頃はだいたい千人ぐらいの村なんです。ですから多分、千人ぐらいが上野村の自然をうまく使いながら、持続的に暮らしていくには、丁度いい人数ではない

かなと思います。

ところが今はその千人ぐらいの村、1100人のうちの25%ぐらいが移住してきた人なんです。村の中には、色々な地域から引っ越して来た人がたくさんいて、その人たちが村を支えているという感じです。で、さらに上野村は村外の協力者は結構多い村でもあります。村に引っ越してくることはできないけれども、何かあったら言ってくれば協力するからと言う、そんな感じで対応している人たちです。実際一年の間に何べんも村にくるというタイプの人達が結構たくさんいます。そういうことを考えていきますと、上野村というのは、伝統的な地域共同体みたいなものが、今でも比較的しっかりしている村なんですけど、その伝統的な地域共同体の構成メンバーの中にたくさんの移住者がいたりします。実際、うちの村にも、伝統芸能といえるようなものがいくつかあって、例えば神社で奉納するものとしては、御神楽を奉納するものと獅子舞を奉納するものとに二分されるんですが、今、そういう神社のお祭りに行ってみると、そこで獅子舞を踊っていたり、御神楽を踊ったりするのは移住してきた人がすごく多い。

つまり、伝統的な共同体が守られていくのだが、そのためにも、村外の協力者が必要だという時代でもあるんですね。そこに新しい形が入ってくるけれど、それは伝統的な関係を守っていくために、新しい人たちがそこに加わってくるということでもある。ですから、農山村の社会でも、共同体を守っていこうというのは、昔の型を守るのではなくて、そこには新しいいろんな要素が入ってきながらも、昔からあったような——上野村で言えば自然と人間の共同体であり、さらには自然と生者と死者と神仏の共同体でもあるし——という共同体をいろんな新しい要素が加わりながら守っていくという、今はそういう形になってきているのです。

8. 未来のヒントを過去からもらう時代を迎えて

これから私たちが新しい社会をどう作るかという時に、共同体的な繋がりを持った社会をもし考えていこうとすると、それは何か形を探すことでもないし、何かこういう組織を作ればいいんだっていう話でもない。むしろ、人間たちがその時の状況、条件を見ながら、いろいろな形で多様に結びつきを作っていく社会、それこそが共同体社会だというように考えていかなければいけないんだろうと思います。

うちの村のある集落は、江戸時代ずっと隠れキリシタンの里でもあったんです。結構大きい集落ですので、お墓がいっぱいあるのですが、墓石の見にくいところに十字架が切っただけのお墓が結構あったりします。隠れキリシタンがなぜ江戸時代ずっと暮せたのかということ、その隠れキリシタンの人たちが上野村の共同体社会の中に溶け込んでいたから。そうすると自分たちの仲間な訳で、キリシタンじゃない人たちも、その人達を密告して、その人たちに危害が加えられることを誰もやろうとしなかったのです。実際、隠れキリシタンの人たちは、クリスチャンなんですけど、村のいろんな神仏の世界にも全部出て行っているし、更に

亡くなると、お寺さんから戒名をもらって、その戒名の中にクリスチャンであることを暗示させるような単語が使われていたりという感じでした。仏教の大日如来とキリスト教の神は一緒だというような考え方です。だから、日本の神仏の世界と融合したクリスチャンでもあり、共同体と融合したクリスチャンでもあった。そのために、江戸時代、誰にも非難されることなく平穏に暮らしたのですね。

明治になりますと、キリスト教は解禁になりますから、新しくキリスト教が布教できるようになるわけです。そうすると、うちの村の隠れキリシタンは、聖書にあるような正当派のキリスト教と遭遇するのですが、今度はこれは自分たちの信仰とは違うということになってしまいました。自分たちの信仰は、村の神仏とも習合しているし、共同体とも融合しているし、そこに神への信仰があるというようなものだったわけです。だから、正当なキリスト教に接して結局、誰もクリスチャンにならないということが起きた。江戸期はクリスチャンだったのに、明治になってちゃんと表立って信仰できるようになったら、一人もクリスチャンにならない。いつの間にかキリスト教が共同体と融合した信仰になっていた、そういう世界こそ共同体というふうに言ってもいいのではと思います。

このように、あらゆる関係性を持ちながら、しかもそれが重層的に積み上がっていきながら、そして自分たちの生きる世界を確信できるようなもの。共同体というのはそういうものなんだと、僕はいつも村にいて思っています。

・ グローバル社会における現代的共同体

現代社会がグローバルな仕組みをつくっていくことは間違いないんですけど、個々の人間が生きている世界というのは極めてローカルなんです。新型コロナウイルス自体は非常にグローバルな存在で、あっという間に国境を越えて世界中で広がる。ところが、それに感染をした人は、極めてローカルな世界で生きているわけです。だから、人によっては特に初期の頃あったように、感染したらまるで犯罪でも犯したような扱いを受けてしまう、そしてそれは非常にローカルな地域社会がもたらしめているものであったりするわけです。あるいは感染したときにはローカル世界の中で治療するし、さらには感染した時に家族にうつさないようにどうしたらいいとか、いろんなことがある。全部極めてローカルな世界なわけです。だから、ある種のグローバルな展開があっても、それぞれがそこで生きて行く以上は、その生きる世界はローカル世界になるということなんです。

どんなにグローバルなものが展開していても、その人間の生き方自体がグローバルにはならない。ある種の移動をしたり、いろんな経済的な関係を作ったり、政治的な関係を作ったりというところではグローバルになりうるけど、その人が本当に自分の足場を置いて生きる世界はローカルだという。そうすると、ローカル世界が、自分にとって存在感のある世界になっていかない限り、結局、振り回されているだけで終わってしまう。

片方ではグローバルに国境を越えていきながら、そのそれぞれの生きる世界は、ローカル

な基盤の中で展開している。ウイルスだってそうです。ましてや人間は、そのローカル世界の中でいろんなものを受け止めるしかない。ここのバランスをどう考えていくのか。ローカル世界に足場を置きながら、グローバルなものともある種の間接関係を結んでいるということに過ぎないのではないか。だから決して、グローバルが軸になって、私たちが動かして行くことはない。やっぱりローカルを元にしながら、グローバルな世界とも関係を結ぶ。それを越えることはないだろうという気がしています。

・2022年における世界、日本の課題

多分、2022年は現代社会の持っているいろんな問題点がますます顕在化していくんだろうという気がしています。格差社会みたいな問題点も顕在化していくし、一人一人の人間の存在感が薄くなって、人間が記号になったり、数字になったりしていくような、そういう虚しさみたいなものも、もっと顕在化していくでしょう。それから実は現代世界は絶えずいろんな覇権争いをしてきたわけです。その覇権争いがますます顕在化して行く。いきなり戦争のような状況になっていくかどうかの問題はともかくとしましても、なにか嫌な対立がますます激化していくようなことも起きていくだろうという感じがします。

新しく何かが起きるといっても、今までなんとなく隠れていた問題点みたいなものがますます表に出てくる中で、この社会を抜本的に直さないとうまくないよねという、そういう気持ちを持つ人たちも増えていくように思います。そういう中で、では何から変えていこうかという話になってくると、キーワードになっていくのは、「ローカル」だったり「共同体」だったり、「コミュニティ」や「関係性」だったりする。そして、その関係性の中にあつたはずの仕事をどういうふうにもう一度取り戻していくのか、ということなんだろうという気がしています。本当にいろんなものを見直していくべき時なんでしょう。

現代社会というのは、実は軍隊の仕組みを民間で応用するような形でできたものがいっぱいあるんです。軍隊のピラミッド構造を民間にもってくと企業の構造になるわけで、総司令官にあたる人が社長みたいな形でいて、ピラミッド構造をつくっていった、上の命令に下が従うみたいな、そういう構造。もちろん、例外的な人たちがいますけど、多くの企業は、この構造を持っている。それから、かつての製造業になると、一斉に同じことをしてものづくりをするという工場がいっぱいできた。みんなが一斉に同じことをするというのも軍隊の仕組みなんです。つまり突撃ラッパが鳴ったら、みんなが突撃する。そういうふうにもみんなが一斉に同じことをするのが、あたかもいいことだというのは、本当に軍隊の構造なんで、これが教育にも持ち込まれたんです。だから、学校なんて本当にみんな同じことをする。大学ぐらいにいくとちょっと変わってきますが、高校までは本当に先生が笛吹いて、みんな同じことをするみたいな、そんな感じがするような授業をしている。いろんな形で軍隊の形が民間に取り込まれて、現代社会をつくっていった。その軍のシステムは絶対的に正しいかの如く支配するという形になっていったわけで、そうすると、企業のピラミッド構造が正し

いかの如く支配し、あるいは市場経済のシステムが正しいかの如く支配しています。全てがそういう感じになっている。軍隊の延長線上でいいのかという辺りも、もう一度問い直されていくのだろうという気がします。軍隊の延長線上で来ているので、どの分野でも勝ち負けにこだわる訳です。企業も勝ち負けにこだわるし、教育の現場でさえ勝たねばならぬ、みたいな教育が行われてしまう。しかし、実際には勝つ必要もないし、負ける必要もないし、そんなものどうでもいいんだよねという世界こそが本当は幸せな世界であるはずなんです。こういう点も含めて、だんだん現代社会が持っている問題点が表面化しながら、それを根本から変えようよという動きがいろんなところに出ていく。今そういう時期を迎えてきたのではないかと僕は思っています。

内山節（うちやま たかし）（哲学者・NPO 法人森づくりフォーラム代表理事）